

特集 普及への取り組み

村越 真

普及を怠ったスポーツに将来はない。これまで組織的な普及の努力が十分でなかったオリエンテーリング界にも、各地で普及への地道な取り組みが始まっている。本号では、小特集として、それらの試みを紹介しながら、普及の意義について考える。

怠られた普及の努力

年末にモンベル社を訪ねた際、社長の辰野氏（ご自身もアイガー北壁登頂経験のあるアスリート）は、「初対面で失礼だが」と前置きをして、40年もの歴史がありながら、競技人口が3000くらいで停滞しているのはどうしてかと、質問された。その間の経緯を手短かに話すと、彼は「先鋭的になりすぎたということでしょうね」と、簡潔にまとめた。つまりマニアックな面が前面に出すぎたということだ。

それだけが理由ではないにしても、初期の徒歩オリエンテーリングの時代を除けば、オリエンテーリング界は、全般として十分な普及の努力をせず、自らの志向を徹底して追求することに専念してきたと言えるだろう。「いいトレイン」「いい地図」、これらは、もちろん競技としてのオリエンテーリングにとって重要な要素であり、またその水準が高くなってこそ、オリエンテーリングの懐も深くなる。しかし、それを満たすことに費やされたエネルギーに比べたら、個々には様々な努力があったとしても、全体としてより多くの人にオリエンテーリングを体験してもらうための努力が今一つだったと言えるのではないだろうか。

普及において、唯一の例外は大学クラブだった。大学クラブはほぼ4年間で学生が入れ替わる。新たなメンバーを増やす努力を怠れば、黙っていても4年たてばクラブはなくなる。彼らは毎年300-400の未経験者にオリエンテーリングを体験させ、そのうち半数以上は継続的なオリエンティアとなり、少なくとも10%以上は卒業後もオリエンテーリングをなんらかの形で続ける。自分たちの周囲のオリエンティアの顔を思い起こしてほしい。およそ30年前までのオリエンテーリング黎明期に始

めた古株のオリエンティアを除くと、大学クラブでオリエンテーリングを始めた人以外の顔を思い浮かべることができるのはかなり難しいのではないだろうか。ここ20年ほどの普及は、大部分が大学クラブによって行なわれたといっても過言ではないだろう。

オリエンテーリングは、競技の様子を見ることも難しく、TV放映もされていない。加えて、小中学校でオリエンテーリングを体験した子どもたちには、むしろネガティブなイメージさえインプットされている。これほど普及にとって条件の悪いスポーツは少ない。どうせ難しいのなら、オリエンティア増加は大学クラブに任せ、むしろそれをバックアップする体制を整えたらどうか。一理ある考え方である。しかし、ここ20年間のオリエンティアの供給源であった大学クラブも、全体として衰退気味である。これはオリエンテーリングだけの問題ではなく、大学スポーツ全般に共通する問題のようだ。広島大学のようなインカレ優勝を誇る伝統校ですら、廃部になってしまったところもある。学連全体としても、加盟員は減りつつある。「学生任せ」というようなのきな意識ではオリエンテーリングの発展は望めないのが、現状である。

なぜ普及なのか？

別に普及などしなくても、自分たちが楽しくオリエンテーリングができれば十分ではないか。実際、普及などせず、口コミ的にしか大会の存在をPRしていないアウトドアスポーツもある。どんな世界でもそれに興味を示す人はいる。たで食う虫も好き好きというわけだ。これもまた一理ある考え方である。そこで、「なぜ普及なのか」を改めて考えてみよう。

普及が必要な第一の理由は、言うまでもなく次世代の育成である。今は元気で、いつかは誰もがオリエンテーリングから退いていく。少子化が進んでしまった現代の日本のごとく、「新しく生まれる人」が少なかったら、社会はいずれ衰退する。社会を維持するためには、「出生率」を維持することが必要なのだ。

第二の理由は、社会的認知を得ることである。愛好者人口が多いということは、それだけで高い社会的認知を受けることになる。またより多くの人に

スポーツの楽しさを提供しているという社会貢献をしていることになる。努力しても、人口の伸びにくいスポーツもあるだろうが、現在のオリエンテーリングは、潜在的には愛好者になってほしいはずの人全てに知れ渡っているとは言えない。彼らはオリエンテーリングを知ることでもっと楽しく充実した人生を送れるかもしれない。

第三の理由は、普及は楽しくやりがいがあるという点である。私はこの5年ほど、小学校でのオリエンテーリング教室や、その他の初心者向けオリエンテーリングを実施してきた。子どもたちは例外なく熱心に取り組んでくれ、楽しんでくれる。大人たちでも、うまく場面設定をすると、その意外な面白さ（多くの人は小中学校で面白くないオリエンテーリングを体験している）を喜んでくれる。初心者たちがオリエンテーリングを楽しんでいる光景を見ること自体、一オリエンティアとして、大きな喜びである。

普及が必要な理由を三つあげたが、3番目の理由だけでも、普及に取り組む価値があるだろう。

普及の現状と問題点

オリエンテーリングを楽しく体験してもらおうという点に関しては、10年前に比べれば、随分選択肢が増え、また一定の成功を収めている。本号の宮城や岡山の報告を見れば分かるように、一般の人々が求めているのは「きれいなトレイン」「最高の地図」ではない。身近にあって、気軽に参加できる大会である。そのような普及のためのイベントは、報告にもあるとおり、一定の成果は上げている。こうしたイベントを地道に続けることが、普及の第一のステップとなるだろう。

問題は、体験した人々にオリエンテーリングを継続してもらう点にある。せっかく経験してもらっても、続けてもらわなければ、何万個も卵を産んでもほとんど成魚にならない鮭のようなものだ。この点で、継続の受け皿として地域クラブの占める役割は大きいだろう。初級者がオリエンテーリングを継続しやすい環境・場面づくりは、オリエンテーリング界の大きな課題である。